

平成 30 年度近畿学校保健学会奨励賞

いじめ場面における傍観者の利益構造の検討 — 個人の性格特性は集団における行動選択の決め手と成り得るか

○五十棲計¹⁾、大平雅子²⁾

1) 滋賀大学大学院教育学研究科

2) 滋賀大学教育学部

キーワード いじめ 傍観者 利益行動

【目的】

近年、「いじめ」は学校現場が抱える問題の一つとして関心が高まりつつある。「いじめ」の問題を議論する上で、加害者と被害者を取り巻く「傍観者」の存在は無視できない。例えば、坂西は被害者が周囲の友人に援助を要請するか否かが、いじめの完全解決に大きな意味を持つことを指摘しており、被害者自身が反撃することができないような孤立状態を生み出している集団の状況こそ明らかにすべき課題であるとしている。その一方で、「傍観者」は、いじめを抑制・停止させるだけでなく被害者の心理的苦痛を低減させる役割を持つことも明らかになっている。

このような背景から、傍観者の行動選択が生起される要因について検討することは、いじめという問題を根本的に解決する上で重要な課題であると考えられる。例として、社会心理学の分野では、計画的行動理論の視点から傍観者の被害者援助行動を予測する因子として、「援助意図」と「統制可能性」が導き出されている。しかしながら、この研究では調査方法が回顧による質問紙調査であったために、いじめに遭遇した当時の状況が正しく回答に反映されていない可能性がある（思い出しバイアス）。これにより、援助行動が実際の生起頻度を正確に反映しているかということについて疑問が残る。また、経済学の分野では、傍観者の利益構造を分析する手法としてゲーム理論が注目されている。しかしながら、ゲーム理論を用いたシミュレーション研究では、傍観者の利益構造が単純化されているため、実際のいじめ場面に還元して考えることが難しい。

以上のことから、本研究では、研究の目的を次の2つに設定した。1つ目は、より現実に基づいたいじめ場面を想定するために、傍観者の利益構造に含まれる要素について検討することである。2つ目は、傍観者の援助行動が生起される要因を検討するために、実証実験のなかで傍観者の性格特性が行動選択に及ぼす影響について分析することである。

【方法】

実験で使用するゲームのルールを決めるために、先行研究から傍観者の利益構造について検討を加えた。その後、男女90名（18～23歳）を対象者とし、実証実験および質問紙調査を、10人ごとのグループに分けて実施した。実証実験は、練習試行1回のあと本試行10回を実施し、その後質問紙調査を行った。

【結果・考察】

(1) 実証実験の結果から、対象者は加害者からの制裁行動を想定した「罰則」の頻度が低いほど、いじめに対して非協力的な行動を選択しやすくなることが明らかにされた。これにより、いじめ場面における加害者の制裁行動が、傍観者のいじめ助長行動を生起する強い誘因となっていることが明らかにされた。

(2) 「援助意図」・「統制可能性」を導く性格因子として予想した「集団主義傾向」および「自己効力感」の高さは、いずれも単一では協力行動の選択率と関連を示さないことがわかった。そこで、集団主義尺度得点と自己効力感得点をもとに対象者をクラスタ化し、グループ内の各クラスタの人数と試行毎の協力行動を選択した人数の関連を分析した。その結果、本試行1回目のときにのみ2因子間に正の相関が認められた（基礎群 $r = 0.885$, $p < 0.01$; 煽動群 $r = -0.717$, $p < 0.05$; 孤独群 $r = -0.854$, $p < 0.01$ ）。これらの結果から、いじめ場面において個人の行動選択と性格特性は、早期の段階でのみ関連を持つことが示唆された。

以上の結果から、いじめの予防もしくは早期対応においては、性格特性を左右する日常生活からの教育や指導が有効であることが判明した。しかし、その一方で継続的、慢性的ないじめ場面においては、傍観者の行動選択は、性格特性に左右されず、環境に依存することが明らかにされた。このようないじめを解消するためには、傍観者が属する環境や制度そのもの見直しを図ることが必要ではないかと、本研究は結論付ける。